

平成24年度鎌倉稲門会総会・講演会・懇親会記録

平成24年10月28日

平成24年度鎌倉稲門会総会及び懇親会は10月28日（日）七里ガ浜の鎌倉プリンスホテルで開催されました。ご来賓は、早稲田大学から地域担当副部長(教育・総合科学学術院事務長)高木範夫様、地域コーディネーター(メディアネットワークセンターマネージャー)伊藤敦様をはじめ、鎌倉在住の六大学校友会(慶応義塾大学鎌倉三田会、東京大学鎌倉淡青会、法政大学鎌倉法友会、立教大学湘南立教会、明治大学鎌倉駿台会)の皆様、厚木、伊勢原、小田原、川崎、相模原、逗葉、茅ヶ崎、平塚、藤沢、大和、横須賀三浦、横浜の各稲門会の皆様をお迎えし盛大に開催されました。



総会

大江保会長が健康上の理由から急遽欠席となり、内海副会長が代行を務められた。冒頭のご挨拶では『鎌倉稲門会会報『笹りんどう』の歴史に触れつつ 史跡めぐり等の鎌倉稲門会行事並びに各同好会の活発な活動が 鎌倉校友

会発展の原動力であり会員各位の積極的参加を期待している」と述べられた。

会務報告については相原幹事長より指名を受けた六つの同好会代表により夫々活動報告がなされた。女性の会・稲田副幹事長、ゴルフ同好会・落合常任幹事、囲碁同好会・稲田幹事、旅の会・田村副幹事長、パソコンクラブ・杉崎副幹事長、茶道同好会・江副常任幹事。続いて相原幹事長より24年度事業計画説明、志村副幹事長より会計報告、藤田会計監査より監査報告、志村副幹事長から24年度予算案説明があり、夫々承認され滞りなく終了。



講演会

講演会は、校友の土屋精作氏(昭43年政経卒)の講演で演題は「鎌倉の吉田松陰～余録」

幕末の長州藩士吉田松陰についての著作は無数にあるが、鎌倉の瑞泉寺との深いつながりについては殆ど知られていない。花の寺として知られる鎌倉の瑞泉寺の和尚(第25世住持竹院)は吉田松陰の母方の叔父にあたるが、今回の講演はペリー来航(1853年)前後の欧米列国の動きに危機感を募らす松陰の思想形成に瑞泉寺の竹院和尚が如何に影響を与えたかを、パワーポイントによる同氏の解説と紀子夫人の朗々とした朗読を交えた素晴らしい講演であった。



松陰は山鹿流兵学を学んだ尊王攘夷の志士として知られるが、ペリー来航の4年前嘉永3年(1850年)九州遊学の際アヘン戦争の経緯など欧米列強の動きを知るにつれ山鹿流兵学の限界を自覚すると共に、強烈な危機意識を持ち、西洋事情に詳しい佐久間象山に師事。象山は「一国の独立を守るためには広く世界を知ることが肝要」と唱え、松陰は欧米列強の力の源泉を見極めようとの大志を抱くに至り、瑞泉寺・竹院和尚を数度訪問。

和尚の禅理に立った高論に感服「国難に一身を捨てて行動する」決意を固めたとされる。海外密航の決意、心情を伝えた時には竹院和尚から「瑞泉寺の楓や青松のごとく、淡々と志に邁進するよう」励まされた内容の詩が後日伝えられている。松陰はペリー再来時 海外密航を企てたが失敗。下田奉行所に自首、江戸送りの後国許で塾居となり安政の大獄に連座、江戸で刑死となるまで国許萩の松下村塾での講義を続け、高杉晋作、久坂玄端、伊藤博文、山県有朋など維新の指導者も松陰の薫陶を受け、世の中を変えるという志と情熱を抱きながら、師の亡き後も、その教えである実践を貫いて、倒幕から明治維新へと、時代を揺り動かした。



松陰の思想の根本は人間の本性を善と信じて疑わないことにあり、誠を尽くして人に接すれば必ず「至誠」の心は通ずるという信念。これが松陰の行動原理。松下村塾の目的も人間の本性から発する良心を磨き、物事の是非の判断能力を広げてゆくことにあったという。学問の目的は経世在民の実践にある。これが松陰の信条であり、ペリー艦隊の威力に接して海外密航を企てた松陰にとって「今何をなすべきか」という問いかけは切実であり松下村塾でも大いに論じられたという。のちにペリーは「日本遠征記」のなかで、国禁を犯してでも世界の状況を知ろうとする松陰の強烈な知的探究心と勇気を高く評価しており、松陰の行動はペリーの日本人観、ひいてはその後の日米関係に影響を与えたといえるだろう。と土屋講師は指摘している。

懇親会

白仁副会長の開会挨拶に続き、ご来賓の早稲田大学・地域担当副部長(教育・総合科学学術院事務長)高木範夫様、地域コーディネーター・伊藤敦様のご祝辞に引き続き 相原幹事長より鎌倉六大学校友会・県下稲門会の皆様の紹介がなされた。



乾杯は六大学野球春季優勝校の恒例に従い今年は鎌倉稲門会の塩川顧問の乾杯の音頭で歓談に移った。白仁副会長による長寿者表彰は今年は被表彰者(ご出席)は斉藤宏民、渋谷泰志、長畑寛昭、長谷川政榮の4氏でした。

今回初参加の会員は、新井肇、北原英一、高橋健治、保坂令子、松本賢悟、味方守信、山田重文、横松宗治の 8 氏で相原幹事長より紹介があった。

今年の懇親会は会員間の懇親の一助としてテーブルを居住地区別にテーブルを配置、ご近所の校友を再確認しあうとともに初参加の会員を囲んでの相互紹介、校友会、同好会の紹介も出来 校友会活動の輪を広げる効果もあり有意義であった。

今年の県支部大会主管の小田原稲門会から末永修副会長のご挨拶に続き、懇親会のメイン・イベントは鎌倉稲門会恒例の六大学の校歌、応援歌のエール交換は今年も早稲田大学応援部・チアリーダーのOB, OGの参加で華やかに且つ大いに盛り上がり声高らかに歌い上げました。締めくくりは佐々木脩副会長の閉会宣言。名残惜しくも散会となりました。(文責：杉崎)



鎌倉稲門会参加者

塩川嘉彦、松谷菊男、小川光治、山ノ上龍太郎、中村省司、早稲田夕季、佐々木脩、内海恒雄、白仁成文、相原州雄、渋谷泰志、稲田明子、志村隆、田村昌恵、小泉親昂、御代川総一郎、杉崎輝之、石渡靖政、藤林明、神田学、千葉文子、若林一郎、後藤辰郎、秋林哲也、福山裕子、江副路子、落合理史、石原巖、前田陽子、竹沢至、足立原啓太、塚原翠、牧野豊、深沢隆史、山下祐司、山ノ上喜一郎、山田英子、藤田耕平、新井肇、新井今日子、石井和子、石井邦夫、石川洋一、伊藤修二、稲田明、今井利種、井元清士、上野尚博、遠藤宏、小木恵介、加藤祐、川端章、北原英一、近藤順郎、斉藤宏民、下村泉、関根善二郎、高谷辰男、高橋健治、武田峯生、土谷清作、長畑寛昭、中村孝彦、檜崎由紀子、長谷川政榮、林陽子、福田國幹、藤森光、保坂令子、正木裕二、松本賢悟、名塚章一、味方守信、森峻、安井敏、山下良作、山田章博、山田重文、横松宗治、植松佐智子 (計 82 名)